



静脩

1994年10月

The Kyoto University Library Bulletin

特集号

本屋と草紙屋

名誉教授 濱田 啓介

刊本と文化——文字・学問

まず始めに申し上げておきたい事があります。

それは、こういう事です。出版ということが行われる事、その事が日本文化にどういう意味を持ったかという、それは非常に大風呂敷の様な事であり、取り留めのない事であり、そんな事を表立った表題になすべくもないのでありますが、始めにその事を言っておきたいと思うわけであります。その後でまた具体的な話に行きたいと思ひます。私は今回の展示に関連しまして京大の図書館の貴重書庫の中へ入る機会を得ました。それは以前にも何遍か入った事があります。しかし、継続して長い期間、その貴重書庫の本を自由に手に取って次々に、またその隣の本を手に取るという機会はしばらくなかった事でした。そこで改めて私が感心しましたのは、これだけ伝統のある大学でありますから当然であります、非常に意外な程、色々な本があるという事、例えば中国の宋版が次から次からと手に触れるのに驚きました。仏典のお経の宋版という様なものは何遍か手に触れた機会もあるのでありますが、儒学の本を含めまして様々な宋版が手に触れる事が起こったのであります。中国の出版が社会的に意義を持ち、技術的にも一番行くところまで行き着いた立派な印刷物となったのは宋版です。それは日本の平安時代のちょうど後半部を含む時代であります、その宋版が少しずつ日本へ入ってまいりました。その時、出版物と日本人とは、初めて接触したわけではありますが、いや、単に木版で刷ったというだけならば、我が国で奈良時代にそういう事をした百万塔陀羅尼のようなものがあるのですが、ともかく書物というもの出版物として我々の目に触れたという事はどういう事なのかと言う事であります。それはもちろん、

また我が国で真似をいたしまして、コミュニケーションの上で時間的に、空間的に、社会的に多数のものを長く保存することができる様になったという事でもありますけれど、ここで忘れてならない事は、字の形がそこではっきりと我々に確認出来るようになったという事が大きな事でなかったかと思うのです。我が国の古い辞書の写しが色々ありますけれども、そういう辞書は、つまり出版物以前の辞書は手書きでありまして、それは多くの異体文字が含まれております。我々の目から見ますと異様な文字が多く含まれていて、そのような辞書を手にしまして、どの字の形が正しい形の字であるかという、その確信をどの様に持てたのかという事をいつも不審に思っていたのであります。それが、非常に堅牢で確固としてその字の形が揺るがない楷書の宋版、宋版は楷書で書かれております、そういうものに触れる時、複数の人々が、同じ字の形を確認することができる様になったのだという事、その事は西洋の印刷技術が西洋文化に与えた影響とはまた別の意味で日本に、日本の文化に一つの影響を与えたのではないかと思うのです。日本の辞書、中世の辞書といいますと節用集というものがありますが、その節用集も殆どは異体文字でありまして、異体文字も色々ありますけれども、お経の写経の文字で大体は書かれております。きちんとした正書の、正楷といいますか、楷書の字体で節用集が出来上がるのは慶長2年の『易林本節用集』からであり、それまでの節用集はその正しい字の形とは違う異様な字を沢山含んでいるのであります。しかし、展示されております五山版、これは正楷の字体で殆ど書かれているのであります。我々の文字に対する文化に風穴を開けたのが、宋からやって来た宋版と、それを覆刻し、あるいは

模刻した五山版であります。しかしなお手書きの人たちは、すぐにその形にならないで、随分異体文字を辞書には用いていたというような状況が考えられるのであります。しかし、やがて出版文化を介することによって、正楷が定着するようになって行ったと考えられます。出版が我が国文化史の上に大きな意義を生じる様になったもう一つの箇条は、学問の在り方が変わったという事であります。それは、中世はご存じの通り家柄の時代で、学問の家や歌学の家があり、それらの家の人々が本をつくります。歌そのものではなく、歌について何かの学説を書いた本が歌学書であります。その歌学書の奥書には、この本は秘密である、敷居の外に出す事を許さないと書いてあるものがよくあるのであります。人に貸してはいけないというのです。学問の権威というものは人に見せるとお終いになるのが中世の文化の行き方でありました。それは他の人も知っている、皆が知っていると言うのであれば、その家柄が、その家の学問を守っている人が特別に尊重される理由が無くなってしまいますからです。それで、その家が尊ばれる、学問が親子代々尊ばれるのは、色々な事を知っているのであらうけれど、それが公開されない形で、中世の学問の権威は守られて来ておるのです。これが、出版の時代になりますと逆に全く逆転することになりまして、学問の権威というものは、出版し、流布し、人々に広まる事によってそのオーソリティを確保する様な、そういう事になります。つまり、時には異説を広めるとい様な言い方で非難されるような、自分の学説を広める様な行動が起こるようになります。これは出版と文化との接触の上において、我が国の、ある文化史的現象として注目すべき事ではないかと思うのです。さて、そのような事を実は結論に持って行きたかったのですが、時間の関係でうまくそこへ話が通じ無いかも知れないので、先にその様な事を申しておいて、それを枕にして話を進めたいと思います。

五山版と募縁勸化

これから、我が国の歴史的な話をさせていただきます。我が国の出版は仏教信仰の宗教活動として始まりました。出版史の上で、初めに必ず出てまいりますのは春日版と言うもので、平安後期から鎌倉時代にわたって出版されたものであります。その春日版の後ろに書かれている奥書を見ますと、そこには例えば、沙門弘睿という人が専心上人の命によって都鄙貴賤の間を勧進して廻ってこれを出版した、時に建暦これこれの年であるという様な事が書いてあります。専心上人という学僧が上におり、その下で弘睿というような、いわゆる勧進聖にあたるものが活躍いたしまして、浄財を募って出版を行ったの

であります。高野山で行われた高野版も名義といたしましては学僧の名前が皆記されているのであります。けれども、勧進という事の上に成り立っていたのであります。それは、例えば、主恩に報いるためにこの陀羅尼を広めるのは私の願いである、というような事で、正嘉2年これこれの日、勧進聖高野快賢、というような事が最後に書かれているのであります。勧進聖の名前が、勧進者の名前が出ております。今回の展示は京都の出版史ということに限った事です。ありますから、春日とか、高野とかという、京都以外のものは省いてある訳であります。この五山版にいたりまして、勧進の様を良く示すものがございます。『元享釈書』の、これは30巻からなるものですが、これの刊行は單況という坊さんが各地を奔走して喜捨を集め廻りまして、一卷、また一卷と多年に渉って逐次刊行して行きました。例えば巻28には、この巻は平安城、京都の町の上池軒という人が財を捨てて出版を成し遂げたものである、時に永和3年9月であるというような事が書かれている訳です。『佛光録』、これは鎌倉五山の出版でありますので今回の展示の外になっているのですが、この上巻の末には32名の名前が列記されており、そして下巻の末ではレジメ（略）にある様な状況になっております。ここにありますように、あるいは三貫文、あるいは二貫文、あるいは五百文なり、板木を二十枚なり、そういうものを皆喜捨義捐いたしまして、出版に漕ぎ着けられた、五山の長老の名前もここに見えており、財力に応じて寄金をしておるのであります。光信という人が板木二十枚を寄せていることは、注目すべきことであります。それから、レジメの左上の方ですが、『景德傳燈録』の巻の九の後ろの所が見えております。『景德傳燈録』は中国の本ですが、これは、いわゆる五山版の、我が国で印刷した本の巻九の刊記です。この『景德傳燈録』は、火災にあって板木が焼けたりしまして、その結果旧版が部分的に残っているところに、一部新版を加えたというような、色々複雑な過程を経ているものであります。この本におきまして、やはりどの巻に、だれが出資したかという様な事が色々な面でこうやって明らかに書かれているのであります。ところで、『景德傳燈録』は大きな本であります。それぐらいの本を印刷いたしますのに、これだけの人が寄ってたかってお金をささなければならぬのであるかという事でもあります。五山は経済的に、十分パトロンもあって立派に成り立っておる、非常に多くの市井の人々から、あるいは、既に僧侶となっている人から何ゆえお金を集めなければならぬのか、という事ではありますが、恐らく純粹に経済的にそうしなければ刊行が出来なかったのではなくて、そういうよう

なやり方をする事自身に、仏籍を刊行する意義があったのだと思います。私は中国の出版物に対しましては全く専門的に発言する資格に欠けているものでありまして、いわば専門外の管見窺覬という範囲での発言でありますので、その事につきましては、中国の出版史、仏教史の方からの十分なご指導を後で受けたいと思うのでありますが、中国の宋版がこういうやり方をしています。宋版・元版の經典の刊行は、東禪寺や開元寺、普寧寺等の僧が、衆縁を募って喜捨を求めて刊行したもので、刊記に施財者の名前が記されています。『無門慧開禪師語録』の巻末をレジメに掲げました。もとの初版の識語ではなく、重刊の時の識語ですが、参学比丘慧廣は、寶鈔5両を勸化してもたらしたというような事なのでありましょくか。で、以下これこれの人、程普覚、丁堅、顧覚通、妙慧とかという様な人がみんな五両、そういう無門和尚の教えを受けた人たちが、募縁して新たに重ねて新刊したという事の様であります。このように、宋・元の師家の語録も、幹縁の比丘が募縁して出版が行われています。日本の五山版もそれにならって、幹縁・募縁・助縁などという言葉を使っています。そういうわけで、この師家の語録の様なものは、広く町中に金を集めたというのではなく、縁、教えてもらった弟子たちが金を、あるいは資財を寄り集めてそうして刊行して行くという、そういうやり方だったと思われます。単に経済上の問題でありますならば、この様な零細な寄付者を募る必要は必ずしもなかったのではなかろうか。五山自体の財力からしても可であり、また武家の後援者をたのむ事もできておるのであります。武家自身が多額の金を寄付したという形にならず、皆比丘たちが、僧侶たちが金を出したという格好でそうなおるのでありますから、それは経済的な状況でなく精神的なものであったらうと思うのであります。

経師屋から本屋へ——石部氏と中野氏

さて、今見ましたようなことが大体南北朝の話なのでありますが、次にこれが足利時代になって参りますと、五山版以外の多くの出版が行われる様になります。各地の寺社でも出版が行われる様になるわけではありますが、寺社でない町方、町衆の有志の者にも刊行するものが出てまいります。実は、堺という地域は出版におきましては先覚地でありまして、阿佐井野版とか、車屋版とかいうものはそういうものでありますが、注目すべきものは石部了冊という出版者の事であります。天正2年刊の『四体千字文』の刊記がレジメにあります。この版は「此板泉州大鳥郡堺南庄石屋町住石部了冊入道新刊巧極妙字迫真奇哉」とあります。これは戦国時代の出版で

あります。五山が主に印刷して来ましたが、内典が主であり、つまり仏教書が多いので、その他に外典のもの、つまり辞書でありますとか、詩集でありますとか、時には儒学のものも多少入っていますが、要するに内典が主です。この『四体千字文』というのは文字を勉強するための本で、仏典ではありませんで、そういうものを堺の石部了冊という者が出版しております。この堺の町人の石部という人は本屋に似た事をやった町人として確認される古い方の人であらうかと思ひます。本屋という事は語弊があり、利益に直接つながらなかったとは思ひけれどもそういう事をやった人であります。この同じ人がもう一つ確認される印刷物を作っておりまして、これが『天正十八年本節用集』というものであります。その刊記に「右此板木者泉州大鳥郡堺南庄石屋町経師屋有是石部了冊于時天正十八年庚寅履端吉辰」、変な読み方ではありますが変体漢文で「経師屋にてこれある石部了冊」と読みます。そこで切れているのはどうも変な文章であります、要するにこの本は天正18年に石部了冊なる経師屋さんが出版したのだという事が謳われておるわけであります。この板木を作ったのが堺の経師屋であるという事は考えてよい事であらうと思うのです。この石部というのは実は、代々経師屋の家であったのでした。レジメの次に『蕉軒日録』文明16年4月5日の所を引用しておきました。この石部了冊という人より多分三代前の人でないかと思うのです。「五日、雨、韋駄天諷経に赴く。東福の経師石部入道幼子卒然として至りて曰く。老父高野山最勝院に於いて、今月一日死す。臥病すること七日、臨終正念、起きて西に向かい念仏、眠るが如し。年五十四と。予の弟子なり。幼子今年十三、千代壽、先月十一日、予高塾に登る。相去ること…死す。法名道永」と、こんな記述が目に入ります。これで、この石部という人について、石部家というのが経師屋の家であるという事、そうして五山に出入りの経師屋であるという事、そこが板木を起こして、いわゆる坊刻、町の者として出版業をスタートさせた、業という言葉は悪いのでありますが、出版という行為に携わって行ったことが分かります。後の『天正十八年本節用集』の方も、これも外典でありまして、仏教書ではなく実用書である。そういうような事から見て、ここら辺に出版という事が宗教界から離れて町の出版物になって行く初期の姿が伺われるのであります。経師屋というものについて少し覗いて見ることになりますならば、本屋になって行く道はたった一種類の道でなくて、色々な所から本屋があつて何ら差し支えないのだけれども、つまり経済力さえあればそういう事をやってもかまわないのであらうし、一概に言える事でないけれども、技術との関係でつながって行つて、本屋の方へ移行

して行く、その道がこの経師屋であつたろうかと思うのであります。お寺の中に色々な出版態勢、お経を作る態勢がある。お経を作るというのは本来板木を作るという事は意味しないのであって、写経というか、その後始末でありましょうか。いわば製本をする、そういう技術者が必要でしょう。大きなお寺は恒常的にお経を、経巻、あるいは、論であるとか、疏であるとかそういうものを本にして作って行く必要があります、そういう事の技術者、経師が存在、付属的に存在しておつたろうと思われれます。その経師なるものは、出版製本の技術を持ち、時には町衆として資力を有する者もあつたのであろうかと思われるのであります。高野版、これは水原堯榮さんの著書に従う事であるけれど、高野の中に大経師を名乗る人がありまして、それがやはり出版の時の署名者にいる例、そういうものを見る事もできます。この経師屋と共に、初期の町の出版というものを、寺社から離れた所の出版として考慮すべきものは、一つは医師、医者であります。阿佐井野家とか、寿命院とか、富春堂とかという医師の人達。医者というものの経済のあり方、を私はまだ知らない事が多いので、医者と文化、医者と経済、医者と出版という事についてはもっと色々学び知りたいたいと思っている事です、とにかく医家ということがある。そしてもう一つ経師屋というものが考えられて来る。で、経師の存在した場所は町の中にもあるのですが寺の周辺に多くは営業しており、寺と関係をし、やがて独立して本屋になって行つたのであろうかと思うのです。そこで、中野という人の系図を出しました。※中野という家は江戸時代の出版業者の一番古い家の一つであります。一番古い本屋と言ってもよろしいのでありますが、この中野というのが経師職であつたと伝えておるのです。『書賈集覧』にはそう書いてあるので、それがいかなる原典によっておるのであるかという、原材料を知らないのではあります、元経師職だということになっています。今日の講演は図書館員の方や、あるいは一般の方や、一般の方の外に多少専門的にやっておられる方もお見えになっておられるという事で、一口でも、まあちょっと目新しいデータをサービスの提供しておこうかという、それ位の気持ちなのでありますが、百万遍の了蓮寺に中野家の墓石があります。伊藤祐昭老師にいろいろ教えて頂いたのですが、半世紀位前に無縁墓石の中から発見され、今それが、不完全な格好であります、残っており、過去帳も、後で調整されたものでありますが、それもありますので、それらを操作いたしまして系図を作ってみますと、こうなるという事を見て見たのがこの系図であります。といいますのは、この中野道伴、中野是誰、それからその下の中野市左衛門、左側の中野道也というのと、中

野小左衛門、これらは皆寛永以降の江戸の初期の出版物に、版元として刊記に名前を出している人達であります。それは一族であらうという事は判るのですが、それがどういう関係であるかという事です。まあ、多分こうなんでは無いかと思うのであります。それから、レジメの左下に村上勘兵衛という名前が出ております。村上という家も、やはり古い本屋で、特に法華宗、日蓮宗の著書の専門の出版社としてずっとあり、現在も血縁の方ではありませんけれども、ともかくその暖簾は引き継いでおられます。この村上氏につきましては、平楽寺という寺号を持っております、この家には、経師書林村上勘兵衛と書かれた、朝廷出入りの門鑑と称する、将棋の駒の形の札を伝えております。家の言い伝え、書いてありますものによると、後陽成天皇の御代に大経師として、経師の親玉として禁裏に出入りを許されて平楽寺という寺号を賜って、平楽寺勘兵衛と称したと言ひ伝えております。似たようなものとしまして、これは江戸の方なんですけれども、須原屋茂兵衛というのは、江戸の、格式の非常に高い風格のある、古くからの本屋さんですが、これは年代的には寛永という所では無いのであります、おなじ様な鑑札を持っておつたのです。おつたといいますのは戦争で焼けたかどうか、その後の事が判らないものですから。昭和11年の『書物展望』にそのようなものが紹介されておるのです。で、やはり同じ様な事で経師である、経師であつてそういう格式があり、それで本屋のパイオニアの一人である。だとすると、林和泉掾もそうらしい。これは出雲寺という寺号を持っています。これもやはり非常に格式の高い本屋さんなんです、同じ様な事情では無からうか、などと思うのであります。つまり、経師屋から本屋へという道筋があつたという事であり。そういう事を考えてよろしいのではない。今回の展示におきまして、図書館の館員の方が地図を作つてパネルで飾つてくれまして、それを見ますと、江戸初期の本屋のあり場所が寺町にずらっと並んでおるので、寺町にあるから寺の事をやっておつたなどと短絡的な思考は悪いのでありますけれども、京都の本屋のあり場所としましては、寺町の二条ということになります。これが大阪であります御堂の周辺に本屋がございまして、それがいつの間にか心齋橋通りにずらっと並ぶ様になり、心齋橋のずっと先の道頓堀の先の方に、今度は板木を海から上げ下ろす所があつて、その間は、御堂との間に本屋が並ぶような状況が起こるという事で、板木屋と本屋と言うものは、これは因果関係、卵と鶏の様なもので、だからその方に本屋があるのか、本屋があるところに板木屋があるのかという事です、江戸でありますと、一番本屋街としてはっきりしておるのは、一つ

は芝の増上寺の門前街で、ここに明らかに仏教書を出す本屋が沢山あって、長らく本屋の多い所である。それからもう一つ、通り本町と言う、通り筋の北方の部分、これは仏教というものを云々する訳でなくて事のついでなんですけれども、ここは板木屋の親玉のおった所で、板木屋仲間の所在地であり、同時にそこは本屋の所在地だった。この事は板木屋と本屋の関係問題で直接経師屋と関係の無いことなのですが、増上寺の周辺で芝が本屋街になって行ったという事については経師屋と関連があるかも知れない。経師屋とはっきり言わなくてもお寺関係の出版物を扱う店が、経師屋を中核にしてだんだん増えて行きもしたのだろうか、と思うわけなのであります。

草紙屋

さて、そういうような本屋は仏教書その他、格調のある書物とか、書籍とかいうものの出版物を営業の範囲としていたわけではありますが、我が国の出版の世界にはもう一つの道筋があった。それは、お経からではなくて、紙を扱う商売から来たという道筋であります。この大きな道筋は私の新説ではなく、中世文学をやっておる人たちには一つの常識的な考え方でありすけれども、それを特に並べて申し述べて行く事とします。京都、奈良等に紙を扱う商売が中世に発生しております。これは扇とか、雛人形を作る家でありまして、その家の特徴は絵を描く技術を伴っていたということでもあります。紙を扱いますので、紙、糊、鋏について、あるいは綴じるノウハウがもちろんあるわけではありますが、もう一つ絵を描く技術を持つ家がありました。これは草紙というものを作る、草紙作りをやる家であります。つまり、草紙屋なるものであります。知られているデータであります、既に江戸時代もかなり進行しまして、寛文期の資料であります『雍州府志』を引いておきます。これは専門の方には何も珍しい資料でもありませんけれども、それは復習をいたしますと、絵草子で、京都の産物がいろいろ書き込まれておる本なのであります。絵草子というのは烏丸二条の北にある。日本では仮名で作ってある本、ひらがな変体仮名の本を草紙と言う、草紙というのは草稿、ドラフトというような意味であります。それに絵を加えたもの、これが絵草紙と言うような事がそこに書かれてありまして、絵草紙の説明がなされているのであります。絵入りとも言うのだというのです。それから絵草紙屋は雛人形を売ることが書いてあって、雛人形や雛遊びの説明がしてあります。このほか、この絵草紙を扱うところでは色紙や短冊などもその家では作っていると書いてあります。絵を入れた草紙を作ると言う、こっちが元とは言えないので、色紙や短冊などを作る方が多分元であったろうと思

うのですが、そういうものが同じ店で作られていたことが分かります。それから、浄瑠璃本という項目がありまして、二条の鶴屋の店、それから九兵衛の店、これは浄瑠璃本が主で、ありとあらゆる本がある。そんな事が書いてあります。それから、カルタの項目があって六条坊門三井家という家がある、金銀箔などを飾って、箔カルタなどとも言われている。これは絵草紙屋がつくるのだと書いてあります。三井家のカルタと言えば有名なのですが、絵草紙屋がそれを作り、つまりカルタ業というか、カルタ製造販売業というか、絵草紙とは相繋がっているというわけです。その次に貝合わせ、あるいは貝覆の貝なのですが、絵草紙屋、張子屋などというものが貝の桶を作る。貝を作ったり、桶を作ったりする。貝覆の貝は、極彩色にいろいろな絵が描かれており、その絵の描き方は絵草紙の絵の描き方と同じです。絵草紙の絵というのは奈良絵本と言われているものなのですが、極彩色で描かれた絵本があります。素朴と言いますか、職人的と言いますか、芸術的とは言えないのですが極彩色の可愛らしい絵が描いてあります。貝覆の絵も同じもので、その様なものを作っている一連の業者があり、どこが一番元とも言い難いのですが、関連してそのような物を売っている。話せばやっかいな事になり、それこそ文学史的レクチャーになってしまうと具合が悪いのですが、中世の物語、絵物語というものは本来は絵巻物の方が先でありまして、粟田口の絵師が巻物を作るという方が先にあって、そこから出発して、それが非常に高級な貴人にたいして呈上された。そういう段階ではまだこういう商売は成り立たないのですが、それが下の方へ下りてくる、最高の貴族足利家位の所に対応していたものが、大名、大名も中位の大名、小名位の所から、町の衆のお金持ちなどの所までも、それにあやかるといって格好となりますと、それに類して、もう少し簡素で、もう少し下手な、下作な、それも最初は絵巻物であり、多量の需要が生じますと、大量生産的に綴じ合わせる、巻物でなく、本の形になって行ったのでしょう。それは主として嫁入り道具と献上品、贈答品などという事で、儀礼的贈答品という事が購入の契機だったろうかと思うのです。で、その草紙を作る、まあ草紙といいますのは巻物ではなく、綴じた本であります。冊子という字を書くほうが本来の言葉で、綴じた本を作った。で、必ず絵が入るわけです。そういったものを作る人たちが、それがやがて出版業を営むようになって行く。これが先程の経師屋に対してもう一つの道筋であります。その草紙屋が作りましたものは、私は文学史方面の者でありますために、そのようなものが良く目に入るというような事かも知れないのですが、文学的な作品、つまり物語的なもの、文学ジャ

ンルで言いますと、御伽草紙と言われているものがあります。どうしてそういうものを作るのかというと、草紙屋自身がストーリーを工夫してというよりは、草紙屋というものは基本的には本を作る、本作りそのものが職でありますので、そこへ、こういう本を作ってくれと持ち込まれたのだろーと考えられます。ちょうど経師屋がお経自身を作る訳ではありませんで、お経を本にすることに携わるのが経師屋ですが、同様に草紙屋はストーリーそのものを作るというよりは、ストーリーが持ち込まれて来るのだと思います。どのようにして、そんな物が持ち込まれて来るかと言いますと、その理由もあります。それは、社寺におきましては京都と言わず、京都以外の各地と言わずですが、その縁起であるとか、あるいはその社寺の靈験譚であるとか、と言うようなものを後代までも残そう、立派な本や巻物にしておこうという事がある。その素材を草紙作りの業者に持込むわけです。それで、そのようなものが物語の様なものになりまして、絵入りで置かれるという要求があったのです。それは、お寺でありますと、お説教や何かの時にそういう物の出番がありまして、聴衆に見せるというような事もあったのです。それで各地の伝説のような話が持ち込まれて来る事が多かったと思うのです。持ち込まれて来て本を作るという時に、ここらは全くの想像で、証拠もないのですが、私は草紙を業としている者はもう一つ複本を作って自分で残そうと家の筆筒の中に入れておいたのだろーと思うのであります。筆筒、まだ引き出しの筆筒はなかったけれど、長持ちの中へですね。つまり、あっちこっちから話が持ち込まれて来て、それでレパートリーを増やして行っただけというのが私の考え方なのです。鉢かづき姫物語というのは交野地域というか、ああいう河内地域の伝説であつたらしいのですが、そんなものが入り込んで来るんでしょうか。そして誂え主のための立派な本を作りますと、その複本をストーリーだけ書いて作っておく。そうこうするうちに、草紙屋には結構そんなものが増えて来る。長い年月がある事ですから、業態も変わるのでしょうが、あるいは謡曲やお能のストーリーを読み物の形にするとか、色々そういう事をやっている。お能を本にするという事も需要がありまして、さっき言いました様に贈答品、あるいは献上品、嫁入り品などに使われる訳であります。武家方にもその要求があり、『鉢木』の様なものは武士の所で立派な、これは奈良絵本の小さなものでなく立派な絵巻物も残っておりますが、大名道具として若殿様に教訓のために置くという事もある。そういう絵を描くのに、立派な絵師に頼んでも良いのですが、草紙屋はそういう事も可能であつたと思います。家内でやらなくても、画師などをいつでも呼

び寄せてやることも出来る様な、そういう店だったのでありましょう。そこでは、普段は職人たちが絵を描いているので、それはカルタの絵だとか、何かというのは、これは何十、何百と同じものを書いてあるわけなので、絵の手本もたくさん置いてあつたのだろーと思うのであります。で、虎というものはこういうものなんだと、中国の王様の絵を描く時はこういう冠で、こう描くんだと言うような絵手本が置いてある。それから草紙屋は、ストーリーを頼まれて作るようになる。場合によってはそれがまた、文章も書くようになっていくように思います。頼まれて書くと言うことは基本でありましょうけれど、草紙屋自身が本作り、つまり『鉢木』なら『鉢木』というストーリー、『百萬』なら『百萬』というストーリーの謡曲を読み物にして作ってくれといわれましたら、謡物、語り物である原作を、散文の形にしておす事、これを草紙屋がやる。その様な事でストーリーを創作、創作まで行かないまでもストーリーを作っていく、謡物を散文にして行くと言うようなノウハウが段々出来て行く。そして、自分のところにはそういうデータが溜まって行き、そういうものから、あちらを採り、こちらを採りする様な文芸作品も出て来るという様な形勢が判断されるのであります。そしてそれが我が国の小説文学の大きな流れを作る。我が国の小説文学、江戸文学のその特徴は、皆それぞれ何々本とか、何々草紙とか呼ばれるものですが、つまり本の名称で作品ジャンルと呼ばれるのですけれど、日本製の仮名で書かれたそういう小説に類する文学はことごとく絵入りである、全部と言ってよろしい。カタカナと漢字の組み合わせで書かれている書物は絵が入っていないというのが原則であります。口絵がちょっとあることはありますけれども、カタカナと漢字の組み合わせのものは、これは挿絵が無い。その代わり、ひらがなで書かれた創作的なものは全部絵がある。江戸文学をやっている者にとっては、これは極めて平凡事であつて、もうそれは挿絵があるのは当たり前になっているのですが、考えてみるに全ての国の全ての小説に必ず絵が入っているのか、どうなのかと思うわけでありまして。中国の明清の小説類は口絵の所に、冒頭のところに口絵がたくさん固まって置かれています。それなら頁を繰り、中を読んで行って、要所要所に挿絵が入っているかということ、どうもそうではない。絵とストーリーとがいつでも絡まっているというのが、我が国の江戸文学の形であつたという事、それが何故そうであるのかということ、これは今言ったこの誕生の経緯に溯って行くと思われる。つまり、草紙屋なるものは、絵草紙屋であつたので、その伝統があり、歴史があつた、それが今言いましたように、元は絵巻物であり、その絵巻物がやが

て奈良絵本と言われる冊子型の草紙になり、やがて江戸時代の小説類の版本になって行ったのです。そこには資本と技術というこの二つの条件がうまく成熟した場合それが木版印刷になるという、一つの飛躍がなければならないのであります。しかし出来上がったものは連続性がありますので、その内容も、それからそこに絵がついているという事も、全くそれまでの絵草紙、御伽草紙と奈良絵本と同じもので、ただ木版印刷ですから色刷りでない、色刷りでないけれども、はじめの内は色刷りでないと何となく落ち着かないと言うような気もあったのか、肉筆で、筆の先で、橙色と緑色、黄色が主の三色で、そんな色をちょっと加えて、いわゆる丹緑本というものを作り、形ばかり奈良絵本に似せている。そういう時代になりますと、元和寛永位ですか、そういう時代になりますと、需要も非常に幅広いところから要請される、幅広い所から出版という技術がなされて、そういう事をする様になってまいります、で、それがやがてちょっと色を付けるということも止めてしまって、定番の、御定まりの、線だけの挿絵と、それから、仮名が多く時々漢字の交じったような本文との組み合わせの、仮名草紙とか、またその次の浮世草紙とかいう時代に入っていく、進んで行くというような事になります。

八文字屋

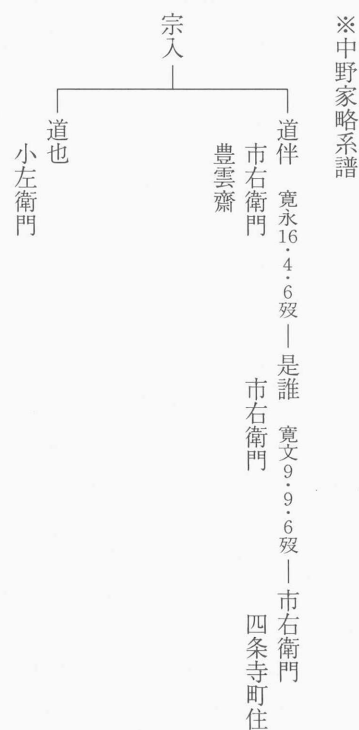
ところで、その草紙屋は何も古い業態に皆固執していたのだと思うのですけれど、二条烏丸とか、鶴屋とか、山本とかいう様な名前が出ていましたが、この三軒程の草紙屋が特に古くからの絵草子の形に固執していたようであります。自由にそういう所から他に成長して行ったり、変わって行って、それはいろいろだったと思うけれど、古い形のものに固執していた店が、これが浄瑠璃本屋というものであります。これは絵草紙屋とも言い、浄瑠璃本屋とも言い、そういう名称で呼ばれ、ある家はずっと後期まで呼ばれている。で、これに引っかけて言いますと、今回の展示でそれが、八文字屋本ということになります。八文字屋というのは京都における三つの浄瑠璃本屋のひとつでありまして、この本屋の業績を展示しておきました。二条烏丸に山本という店と鶴屋という店が近くにありまして、もう一つ麩屋町誓願寺に八文字屋というものがありました。山本と鶴屋の二つの方が先に大をなしまして、八文字屋というのはそれに比べると少し頼りなく、それらを追いかけていたのですが、八文字屋の主人に自笑という人が出るに至って、大変大をなすに至るのであります。八文字屋の本をこの展示会で出すことには随分悩んだのです。何ゆえかというと、五山版や、伏見版とか、本能寺版とかは良いのでありますが、それから

後の江戸時代に入りますと、天下の出版物は皆京都が主流でありまして、江戸時代初期の本屋の歴史という事をやろうとすると、出版の大半は京都だから、これは大変な事になります。宝暦位から京都が必ずしも優位を占めなくなり、江戸の方がもっと強くなったりいたしますし、一時は大阪が一番強かった時代もありますけれども、それはそれといたしまして、大体大阪の本屋も、江戸の本屋も、京都の本屋の、それぞれの出店が独立した様なものであります。増上寺の周辺の本屋といっても、京都の本屋の別れが行っている店が何軒も確認されるのですから。そういうわけで、京都の本屋の全貌を展示するなどという事はとてもできないことです。それならばいっそ京都の一つの本屋だけを選ぼうと思ひまして、それで京大の蔵書の状況を考慮しまして、八文字屋一軒で代表させてみようとしたのが、その結果でございます。この八文字屋という本屋は浄瑠璃本屋でございます、もともと浄瑠璃を扱っていた。この初期の浄瑠璃本にやはり絵が入っておりまして、展示には『宇佐八幡宮由来』という薄っぺらな紙を使いまして、そして絵を入れて、細かい字で書いてありますが、そんなものを出してあります。浄瑠璃は絵草子屋のレパートリーとして特定されている分野であります。つまり、浄瑠璃本屋というのと、絵草子屋というのは実は同意義でありました。元は絵草子屋としての、書き本というのですが、写本の絵草子を作っていたものを、それぞれ普通の本屋に変わっていったりしているわけでありまして、最後まで浄瑠璃を自分のレパートリーにし続けていたのが、この鶴屋と山本とそれから八文字屋という人たちでありました。ただ八文字屋は、自笑は二代目ですが、初代が浄瑠璃ばかりやっております、そしてやがて、二代目の自笑になりますと、それは元禄期のこと、同じ演劇関係でも歌舞伎の方に転向いたしました、歌舞伎専門の業者となり、浄瑠璃の方は残りの本屋に譲りまして、その頃は、まあ浄瑠璃の本場が大阪の道頓堀に移ったという、そういう事情もあり、大阪の本屋が近松の浄瑠璃をすっかり出す様になります、それでも八文字屋は演劇関係の本屋としてやってゆき、そして小説をやがて出す様になります。小説を出しますと、八文字屋本時代というべき、江戸時代の前半分の終わり位いの所ですね、元禄の後ろの時代ですが、その間ずっと八文字屋という本屋が一番多くの小説本を出している訳であります。その小説に皆挿絵がついております。この浄瑠璃本にも挿絵が付き、それから演劇に転向したというその時の演劇の本、これは皆挿絵が付いておりまして、絵入り狂言本といわれております。そしてその演劇のもの、よく元禄歌舞伎と申しますが、元禄歌舞伎というものが何で判るかといいますと、脚本

そのものは残っていないのであるけれども、それを大幅に取り入れて読み物にした絵入り狂言本というものがあるので、それによって藤十郎なんかの演劇が判るわけであります。けれども、それは皆挿絵が付いている。八文字屋というのはこの、歌舞伎の方の読み物でもって業をやっておった。ところが、そこへ一つの条件が加わりまして、歌舞伎の評判記、つまり歌舞伎の芸評、案内評論の様な本を出すという事を、演劇のつながりとしてやるようになります。それは横に長い本で、これもやはり絵が入っていますが、それが事の起こりで、小説も、そんな横長の本で出すようになり、やがてその本はもっと縦長の、もっと本らしい本に変わって行くという、そういう歴史を持った本屋さんです。事の起こりは、つまり評判記がなければ八文字屋の小説類も無かったんでしょし、その評判記があるというのは、演劇に踏み込んだからでありますし、演劇に踏み込んだ訳は、その前に浄瑠璃をやっていたからである。浄瑠璃をやっていたのはなぜかというと、絵草紙屋、草紙屋という業態の中のそれがレパートリーであるからそうであったという、溯るところいう経緯になって、草紙屋側から出ました小説出版の雄と言いますか、代表的な本屋さんになって行った、こういうことでございます。さて、この草紙屋は中世を通じまして、本を扱う上に、書物屋と紛らわしく、互いに垣根が崩れ、相互乗り入れするのですが、伝統的に書物屋とは別の業態であると世間が認めたりいたしまして、大局的には本屋仲間の中に入っているのですけれども、草紙屋という扱いを特に受けるという事もありまして、そういう表現が江戸時代の後期まで続いて行きます。

さて、この話を続けて行きますと、とりとめが無くなってしまつて、先程言いました元の所へ戻らないと、文化史の意義付けという事にはならないわけですが、本、出版が商業と結びつくということ、コミュニケーションを少しでも遠くへ、広く社会的にも、立体的に多くコミュニケーションしたいという人間の欲求が、次々に新しい技術を作っていきます。先ず文字が発明されたという事がその一つであり、それから木版印刷が生じるという事で非常にコミュニケーションが幅広く展開することが出来るようになります。その後、金属を使った活字になり、現在はさらに電波を使うような、立体的なコミュニケーションの時代になって来ております。その現在のコミュニケーションの、その前の時代のもう一つ前の時代の所は、ちょうどこの木版印刷の時代であ

ります。我々は木版印刷が出来たという条件として、技術と資本力という事に思いをいたす必要があります、そういう事によって木版印刷というコミュニケーションが成立し、そして文化が市民文化になって行きました。市民文化になって行ったという表れの一つは、始めに言いましたように、例えば学問が、家の中で保存すべきでなく、多くの人々にその学問の成果が、皆に見られている事によって、秘密にする必要はなく、安心してその学者のプライオリティーも守られて行くというような、そういう時代が近世に行われたわけであります。今の本屋と草紙屋という話をどこまで続けて行っても、この出版と文化という事の全体的な洞察の所にはなかなか引き戻しにくい事でありますので、とって付けた様な結論の物の言い方でありますけれど、そのような事を申し上げて本日の講演を終わらせていただきます。



(本稿は、展示会「京洛出版の軌跡——五山版、古活字版、八文字屋本——」の開催に合わせ、平成5年12月7日に附属図書館AVホールで行われた講演記録に加筆修正を加えたものです。この講演会は、近畿地区国公立図書館協議会主題別研究集会をも兼ねて開催されました。濱田啓介名誉教授は平成6年3月31日まで、総合人間学部教授を務められました。)